

戦争を前に 国際政治学者に 何ができるのか

政治学者

井上正也

いのうえまさや
1979年大阪府生まれ。慶應義塾
大学教授。神戸大学大学院博士
課程修了。博士（政治学）。専
門は日本政治外交史。著書に
『日中国交正常化の政治史』、共
著に『評伝 福田赳夫』など。

ウクライナで戦争が起こってから、国際政治や安全保
障の専門家を連日テレビで見るといった。とりわけ
中堅世代の研究者の活躍が目覚ましい。テレビや新聞の
みならず、ソーシャルメディアを通じて、最新の情勢分
析や自らの見解を活発に発信している。
いうまでもなく、ロシアやウクライナを含めたヨーロ
ッパの国際情勢に精通し、分かりやすく解説できる人材
は一朝一夕には育たない。危機に際して、こうした役割
を担える新しい世代の国際政治学者がメディアに台頭し
てきたことは、日本におけるアカデミアの層の厚さを示

系的に吸収して、それを活かそうとした。

こうした日本の国際政治学の方向を定めたのは、なん
といつても第二次世界大戦の敗北である。1945年8
月の敗戦後、多くの人々が一樣に関心を持ったのは、日
本がなぜ無謀な戦争に突入したのかという問いであった。
今日のロシア国民と同じように、大多数の日本国民は自
国の政策がどのように決まっているかを知ることができ
なかつた。戦後になって、過去の戦争の原因を知りたい
という知的欲求が日本社会に広く生じたのである。

62（63年）である。

原文書や関係者へのヒアリングを駆使した同書は、昭
和戦前期の日本外交を考察する上での必読書となり、続
く1970年代には英米の研究者と戦争原因をめぐる国
際共同研究も進められた。
日本の国際政治学の歩みを振り返ると、戦争に直面し
た時、国際政治の研究者に何ができるかを改めて考え

している。
日本の国際政治学の強みは、歴史研究と地域研究にあ
ると言われる。国際政治研究に関する国内最大の学会で
ある日本国際政治学会（JAIR）は、1956年の創
設当初、外交史と地域の研究者が中心となっていた。外
交史研究者は、下部構造を重視するマルクス主義歴史学
とは一線を画し、史料に基づいた実証的な政策決定過程
の分析を通じ、国際政治の動態を明らかにしようとした。
一方で地域研究者は、自らの専門とする地域で起こった
現象をより深く理解するために、国際政治学の議論を体

せられる。医学は病や怪我から人の命を救い、工学は人
の生活を豊かにする。それら比べて歴史や地域の研究は、
戦争を直接防ぐことも止めることもできないのかもしれ
ない。だが、優れた研究は、事後的ながらも過去の
地域で戦争がなぜ起こったかを明らかにし、歴史の教訓
と将来への展望を人々に与えられる。

例えば、第一次世界大戦の勃発過程を描き出したバー
バラ・タックマンの『八月の砲声』（1962年）という
名著がある。第一次世界大戦が、関係国の誰もか望んで
いなかったにもかかわらず起こった戦争であることを示
した本書を、キョーバ危機に直面していた米国のケネディ
大統領が読んでいたことはよく知られている。タック
マンの著作が直接戦争を止めたわけではないが、ソ連と
の核戦争を回避したいと考える政治指導者の心象に影響
を及ぼしたといえよう。

昨今の実学志向なかで、古い出来事や狭い地域の研
究に何の意味があるのかという批判を目にすることも多
い。だが、実はそれこそが複雑な現代世界を理解するた
めに最も確実な方法なのだと言いたい。

